

## 我が国の産婆』

—

朝起きたのは、カラムが枕のそばに置き、信用深く掛け布団を上には掛けた「チエゲル」の羽にくすぐられたからだ。チエゲルが動く、その羽や翼が私の顔に触れて、ついにそれで起きられた。

まだ疲れていて、眠かった。昨夜の赤ちゃんが遅くて、ずいぶん困らせてくれたが、嬉しかった。半分黒くて、半分茶色の、大柄の男の子で、その顔を僅かに叩いてみると、手足をクリーバーにでも切断されたように大げさに泣き出した。妻帯を切って、赤ちゃんを洗って、母のそばに敷かれている、綺麗なタオルの上に置いた。そして、母の頭を上げて、肘窩に乗せた。女はなんて明るい、青い目を持っていた。銅の丸のような顔をしていた。あの桃色で綺麗な、トルコマンの顔。大柄の女だったが、若くて、年が十七か、十八を過ぎていなかった。しかもこれは彼女の二人目の赤ちゃんだった。私の顔をじっと見ている彼女の、痛みで歪んだ唇に、油や樹液の生温い飲み物の椀を近寄せて、彼女に飲ませた。彼女はその半分を飲んで、手で椀を押し返し、頭を枕に落とした。白い枕の上に散った彼女の髪は純粋にブラウンだった。

彼女の旦那は、気楽でのおんびりな人に見えていた。ウォッカの大きなボトルを手に持っていて、二人目の息子に乾杯していた。「じいさん、私の世話をみな。もう帰るか」と言うと、彼はポケットに手を入れ、二十トマンの紙幣を出して、綿の掌に置いた。そして、じっと私の目を見た。なんて青い目。なんて妻の目に似ていたな。従兄弟同士だろうな。二十三、四歳の若者だった。私のカラムより、七か八歳年上だったが、背が四本の指だけ彼より高かった。私のカラムは背が高いから。兵役をしたアヤズは父親似で、ちよつとずんぐりしているけど、力が非常に強い。いつもカラムを頭の上に入れて、地面に落とす。カラムは仕方がなく、後ろからアヤズの下半身を掴んで、押ししめる。アヤズが絶叫して、苦しみ、足で蹴ろうとする。と、肌や骨しか残っていない、姑が、笑い出す。彼女は、昔、胃の半分を手術で失くして、普段、主人の兄弟の家に住んでいるのだ。こんなことで姑は一日も笑う。上機嫌で勇敢な女なのだ。路地に迷って、笑い出す。息子の頭に紅茶を零してしまった時も笑い出す。主人が怒って、あらゆるものを罵りはじめる。主人が自分の悪い運命や母を罵るのをやめるまで、彼女はずっと笑う。主人によると、彼女は一度、屋上に寝た時、真夜中に寝返って、落ち、足を折られたとい

う。皆は彼女がもう死んじやったと思ったが、彼女は気楽に笑っていただけで、狂ったんじゃないかと思つた人もいたそつだ。死に際にも笑うのだろうか。

金曜日だった。窓のガラスの後ろから、カラムの鳩達の籠に傾いている、兵役の制服を着たアヤズを見た。カラムは手を鳩で満たして、籠から出してた。カラムは、雪の積もっている真冬に、襟の開いたシャツと薄いズボンを見につけ、屋上に行つてた。雪が昨夜積もつたんだ。なんてすごい天気。でも朝から晴れてた。なんて鮮やかな陽射し。雪がチラチラと輝いていた。

チエゲルに傾いた。なんて不思議な生物なんだ。なんていい動物。雌の鳩は、何か特別な匂いをして、人を陶醉させるんだ。嘴の先は人の爪の端と同じ色で、その色がちよつと濃くなっている。そして、その無邪気な目が、二つの優雅なボタンのように動いている。心臓が厚い羽の向こうに怖がって激しくドキドキしている。心配になって、立ち上がった。窓を開けて、カラムを呼び出し、チエゲルを飛ばして放つた。離せない生物が翼を叩き、そしてもつと強く叩いて、多角へ飛んでいった。カラムはもう一羽の鳩を飛ばして、二羽の鳩と一緒に飛びはじめた。まったく、鹿みたいだぞ」カラムは言った。とアヤズは「お前は狂っているんだ、狂ってる」と彼に返した。私は窓を閉めて、もう彼らの話が聞こえなかつた。

朝は、なんて家が寒かつたな。地階に行つて、薪を三、四本持つてきた。地階の方が暖かかつた。けど、洞窟みたいで、淋しさの湿っぽい匂いに溢れていた。薪をストーブに入れた。一枚の布を石油のバレルに入れて、ストーブの中に捨てた。石油の匂いは妙な鮮明さがある。マッチを擦ると、燃えた硫黄の匂いも鮮明だった。マッチをストーブの中に投げて、そのドアを閉めた。ゴロゴロの音が立ち、石油が燃えてしまつと、薪の燃えるパチパチの憂鬱な音だけだった。薪が燃える音があまりも淋しくて、気分が物憂くなつた。ストーブの穴の向こうから、炎が人と話をするのだ。アヤズとカラムがドアを開けて、入り込み、共に雪や風を部屋に入らせた。ふと肩が振るつた。カラムがじつと私の目を見た。

「また泣いてるじゃないか、お母さん。おばあちゃんのことを思い出したの？」

そう言つて、私の頭を撫でた。なんて冷たい手。時に、人は誰もを思い出さず、理由も分からず、泣くんだつてことを、どう息子に説明すれば、いいんだろう。ただ深く、柔らかくて、生温い、春の陽の光みたいな点が心の中に現れる。けして悪い感覚ではなく、それどころか嬉しい感覚で、泣かすものではないけど、人はつい泣いてしまつ。アヤズは前に出て、手を私の顔のそばに置いた。私の目は彼の手の中にあるよつな感じ

だった。なんて父の若い頃に似ているな。あいまいで縁起の悪い感覚を受けた。三十年若くなつて、主人も三十年若くなつて、私は彼の家に来たばかりの時だったよな。目が乾いているようになったが、妙な感じに息子のアヤズの顔をじつと見させられていた。アヤズも呪われているように、私が見えないように私を見ていた。私の目を通して、別の人に会おうとしていたように。

また、愛しくなつたね」とカラムがすごいヤキモチを焼きながら、言った。顔をアヤズの手から離して、立ち上がった。部屋は完全に暖かくなつていた。

座りなさい。朝御飯を用意するから」と彼らに言った。

部屋を出た。なんでこんなに目眩がするんだろう。朝からの、不気味な予感は何だろう。けれど、罪悪感を感じていなかった。固形油をスプーン一枚、冷たいフライパンに入れて、フライパンが段々温かく、そして熱くなって、スプーンのくぼみの形をしている油が徐々に溶けて、広がって、もう形ではなくなる、そういう感じ。私は、もうすぐ溶ける温度になつた瞬間にいた。カラムとアヤズはどう考えているんだろう。主人は、私がこんな感覚を感じたのを知ったら、何を言うんだろう。妊産婦達は？でも、他人の言うことが大事なんだろうか？それに、私自身が理解できない感覚を他人が理解できるはずはないのだ。けれど、他人が自分よりよく分かる物事がある。

固形油をフライパンにのせ、温めた。そして、固形油が溶けたとき、四つの卵をフライパンに炒めた。熱くて冷たい、油の中に焼ける鮮明な卵の匂いが漂った。塩を掛けた。主人が朝、出かける前に、サモワールを点けて、紅茶を用意していた。サモワールを取って、ストーブのそばに運んで置いた。それから、クロスを敷いて、温かいフライパンを部屋に持っていった。座って、サンガクのパンに目玉焼きをいっぱい入れて、カラムの方へ行き、目玉焼きとパンを無理矢理に彼の口に入れ込んだ。と、彼は手で覆っている、焼けた口で「口が焼けたよ、お母さん、口が焼けた」と悲鳴した。

嫉妬深い人は、口だけじゃなくて、鼻も焼けるべきよ」と彼に返した。アヤズは笑い出して、クロスの前に座った。私も座って、カラムもクロスの前に来て座り、朝御飯を食べ始めた。

幸福な母親とは、私のことだ。神様は、十年間も子供を授からなかってから、二人の息子を授かってくださつた。一人は十八歳になって、もう一人は十四歳になっているのだ。それ以来も子供に授けなかった。私の仕事は、赤ちゃんを産ませること。母も同じ仕事をしていた。この仕事を彼女に教えてもらったのだ。彼女も自分の母に教

えてもらっていたのだ。後で、国立病院の助産師のもとに働いて、しばしば女性の体に関わる知識を得たのだ。その知識はあまり役に立たなかった。たまに妄想させるだけだった。

赤ちゃんがどう生まれるのかを初めて見たのは、十二歳の時だった。それを忘れたことは一度もない。母は、大柄で肥満な女に呼吸して、力を入れなさい、呼吸して、力を入れなさい」と叫んでいた。女の脚の間から血や血漿、ときに水が出ていた。彼女の脚が完全に開いていて、力を入れすぎると、内臓や腸が脚の間から出てしまうような状態に座らせられていた。そして、なんて温かい赤い顔をしていた。時には悲鳴を上げて、時には唇を噛んでいたが、とにかくまず呼吸して、そして力をいっぱい入れていた。私と母は、女の開いている腿の前に座っていて、一緒に血や血漿を拭いていた。母は息を止めて、私は何を待っているんだとよく分かっていなかった。そんな時に、奇跡が起こった。女のおその周りにもう一線の皺、更にもう一線の皺が現れ、現れた皺がもとの皺と混じった。母が「力を入れなさい、力を入れなさい」と叫んで、女は力を入れて、更にもっと力を入れると、もう一線の皺、そして何線の皺が現れ、その絡んでいる皺が、生まれる赤ちゃんの頭や顔だと分かった。神様よ、なんてすごい奇跡なのだ。いよいよ赤ちゃんの体が出た。母の手の中にいて、赤ちゃんが泣いていた。と私は、閉まりつつあり、皺が血まみれになった、肉質の空の穴の中をじっと見ていた。そして、胎盤が出た。なにか不思議な物、血の塊。そして奇跡の穴は、肉と肌でできた、血まみれの扉を閉めてた。

その後も、何度もその奇跡を母と一緒に観て、けして満腹感を感じなかった。母が死ぬと、助産師になると、町の人々に頼まれた。主人には前に奥さんがいて、出産のとき亡くなってしまった。その夜、彼は非常に泣いて、とても可愛そうだった。翌朝、私に結婚を申し込んだ。けして仕事を辞めさせられない条件で、二、三週後、彼の妻になったのだ。彼は条件に応じた。主人はいい男だ。苦情などない。後で、実力のお陰で、巡礼者の管理庁長官になった。これよりめでたいことはあるのだろう。けど、私はあの奇跡に憧れている。

二

昼、主人は、帰ってきた時、何もする前にまずアヤズとカラムと懸命なレスリングをした。帰った途端、外套とコート脱いで、コートラックに投げ、アヤズに声を掛けた。

「よし、前に出る、チャンピオン。軍事基地で教わった技を見せてみる」

「軍事基地は体育館と違っただろっ」

カラムが前に跳んで、お父さん、僕とレスリングしてみる、勝つと言うなら、レスリングしてみる」と挑戦した。

主人は「いや、君が怖いんだ。俺の技を全て知ってるから。でも、アヤズは技なんか分からないんだ」と上機嫌に答えた。

カラムが技を分かっているってことは、チエゲルを飛ばして、他の放鳩者の鳩を誘惑させる以外に何も分からないんだ」とアヤズは返した。

「ずる賢いあなたも女の子達を誘惑させるじゃない」と私は言った。

「この」と主人がアヤズを襲ったが、アヤズは攻撃を避けて、父の後ろに行き、彼の腰を捕まえて、上げよとした。けど、主人の脚は地面に根を張ったよだった。手を上げて、アヤズの頭を捕まえて、引くと、アヤズは鞭みたいに飛んで、主人の前に落下した。

君たち三人を相手にしても、いいぞ」と主人は挑戦した。

私は笑って、あなた、私はいつからレスリング選手だというの？」と返した。

主人は息子達に向かって、どの側が勝つのか見てみよっじゃないか？君たちとお母さんが勝ったら、お母さんをメッパに連れて行ってあげるぞ」と言った。

私は「これもまた守る気のない約束でしょう。あなたは明後日、出発するじゃないか？どうやって、私を連れて行ってあげるつもりなの？」と言った。

俺は巡礼者の管理庁長官だぞ。二日で旅券をもらえないとでも言うの？」

天丈夫さ、お母さん。挑戦を受けてみよっ」とアヤズは言った。

カラムは「よし、お母さんは応じた」と言って、構えて、父を襲った。私に代わって、決めたり、話したりするのはカラムの習慣だった。もう私の後見人になるのを習っていた。

アヤズはカラムを応援して、主人を襲った。私も主人の方へ行って、敏感なところをくすぐり始めた。主人は笑って、私から離れたり、息子達をあっちこっちに投げ飛ばしたりしていた。彼を離れて、息子達がかかってくるのと、私もまた主人をくすぐっていた。とうとうカラムは彼の一足を捕まえて、アヤズももう一本の足を捕まえ、皆で彼を転覆させた。主人は降伏した。

彼は立ち上がったとき、喘いでいた。お母さんをメッカに連れて行ってあげべきだぞ。自ら挑戦して、負けたんだから」とカラムは言った。

主人はコートを持ってくるとアヤズにサインした。そして、私を見て、ウインクした。彼の目はずる賢いさに満ちていたのだ。

俺は理由もなく負けると思ってるんだい？そう思う俺は理由もなく負けてしま  
う？」

アヤズはコートを父に差し渡し、待ってみた。主人はポケットから、旅券を出して、カラムに渡した。

読んでみる」

カラムはそれを読んで、私にトルコ語に訳してくれると、私は夫の方に飛びこんで、彼にキスしたりした。子供の前だというのに、ちっとも恥ずかしなかった。

考えてみて。万国から、来た人々が巡礼して、私も巡礼の白衣を着て、石を投げる儀式をしている。それとも、大勢の中に迷って、あなたを探している」

「お母さん、お父さんじゃなくて、神様を探す儀式の巡礼だぞ」とアヤズは言った。

私は探したい人を探して、必ず見つけ出すの。私はこの町の助産師よ。助産師とは探して、見つけないわけにはいかないわ」と私は返した。

「もつでたらめ言うなよ。一刻も早く準備をしないで。ここ三週間は産む妊産婦がないだろうね？」と主人は言った。

私はよく考えて、「カ月後までいないと思うよ。けどエスマットに話して、彼女に妊産婦達を訪ねてもらわなくちゃ」と答えた。

「明日は準備を完了するんだよ」

なんていい。なんて嬉しい。一羽の可哀相な鳩が窓の向こうに座ってきていた。寒さに凍んでいた。カラムはまだ鳩が見えていなかった。私は後ろ歩きして、窓のそばに行った。何ごともないように皆を見ていたが、二つのことにしか考えていなかった。メックと鳩。窓を恐る恐る開けて、部屋の中を襲った寒さが私の意図を皆にばれさせてしまったのが心配だった。鳩はちよつと動いたが、飛んでいかなかった。非常に寒くて、そういう力が残っていなかった。手を鳩の方に伸ばすと、従順に私の手の中に来た。神様

よ、なんて寂しい鳥。なんて寒がっていた。窓を静かに閉めて、鳩を胸に抱き、その脚の柔らかさを胸の間に感じた。毛が立った。なんて優しい。服を鳩の上に掛けて、暖めてあげた。そして、徐々に部屋の中に行った。服の下にクークーして、ばれさせてしまつのが心配だった。主人と子供達が傾いて、昼御飯の準備をしていた。クロスは敷いてあり、真ん中に大きな大皿が置いてあった。私はそれを取って、中に鶏の料理を入れ来て、クロスの上に置くべきだった。クロスに近よって、少し力が入った鳩を大皿の上に置いた。鳩は立って、一瞬ためらって、回りを見た。主人とカラムとアヤズは、皆で鳩のほうに飛び込んだが、鳩は先に飛んで、座る場所を見つけなくて、私の肩に座ってきた。三人ともは立ち上がった。啞然としていたのだ。

どこにいた？僕の鳩なの？」とカラムは聞いた。

どこから来たんだ？窓が閉めてあるじゃない？」と主人は聞いた。

お母さん、今度は鳩に産ませ始めたの？」とアヤズは言った。

私は手を伸ばして、鳩を取り、カラムに渡した。

ほい、あなたの鳩じゃないけど、上げるよ、メッカのお土産として」

「いいメッカの巡礼だな。お土産は手持ちの現金だ」とカラムは言った。

鳩にエルナズを名付けた。なんて可愛い。主人が名前を選んだのだ。彼はトルコの上品な名前を選ぶのが上手だ。言えば、チエゲルとエルナズは主人の娘達なのだ。

### 三

夜は夢を見ていた。それもなんて夢を。深い穴に、真っ赤な肉でできた穴に手を入れて色んな色の鳩を出していた。鳩を嗅ぐと、赤い肉質の穴の匂いをしていた。なんか誘惑させる不思議な匂い。鳩達を空に飛ばしていた。空は愕然とさせる特別な色になっていた。写真をしか見ていない、モスクのドームの色。あの肉質の赤い穴に口をつけて、呼びかけていた。誰をう分らない。お出で、お出で、会いたい、お願いだからお出で、お出で、会いたい」と言って、穴のドアにチューをしていた。あのドアは、海の匂いと味をしていた。我らのシャラフカネ港の匂いをしていたかも知れない。なんて不思議な状態。なぜか、罪悪感を感じていなくて、恥ずかしくもなかった。なんて自由になっていた。舐めた塩のせいで、唇も酸っぱい味をしていた。舌で唇を舐めていた。肉質の穴の匂いが塩漬け肉の味に加わって、海苔の匂い、それとも女性のおそこ

の毛の匂いに似ていた。そして、また口をあ肉質の穴の一つにつけて、叫んでいた。それも、何て高い声。なんて興奮していた。興奮のあまりに汗まみれになって、毛が立っていた。なんて激しい陶酔。お出で、お出で、会いたいの、お願いだから、お出で、お出で」。呼びかけることだけは楽しくて、興奮させるに充分だったようで、穴の中から誰かが来て欲しくもなかった。そして、手に鳩を乗せて、雌の鳩を全て乗せて、掌を空のほうに上げて、家の屋上を全部、鳩の羽で覆わせていた。そして、また肉質の扉の巡礼に行っていた。カラフルで湿っぽい廊下に入って、「お出で、お出で」と呼びかけていた。と、大勢の裸の女性が見えてきた。はたして彼女達は何処から来て、何処に行っていたんだろう。彼女たちの脚や脚の後ろは、なんて柔らかかった。歩くときは、誰かを起こすのを避けようとするように、それとも自分が起きてしまうのを避けたいように歩いていた。団体に次いで団体、百人に次いで百人、二百人に次いで二百人、千人に次いで千人、みんな裸で、無口に歩いていた。まるで夢遊病状態に歩いているようだった。みんな同じ大きさの顔をして、平等に麗しかった。トルコマンの膨らんだ頬や、サバランの鮮明なハチミツの色をした、青い目。私は「お出で、お出で、会いたいの、お願いだから、お出で」と叫んでいた。と女達は、スワンの羽のような脚の後ろやハチミツの色をした無邪氣の目をして、通っていた。世界は裸の女、自由な女に溢れていた。

そして、夢の環境が変わった。トラックの中に、色んな大きさをしている小石の上に座っていて、どこかに向かっていた。何処に？分らない。トラックを運転していたのは主人だった。あそこ、遠くに、大変の状況になっていた。小石を全て悪魔に投げる予定だった。女性に男性は巡礼の白衣を着て、皆なんて若くて、綺麗な顔をしていた。みんな同じ年で、顔が似ていた。女と男は同じ性なのようだった。が、どの性なのか、分からなかった。頭の上に、カラムの鳩達が五百、六百羽の群れになって、空を飛んでいた。カラムはどこから、こんなに鳩を手に入れたのだろ。その後、主人が見えた。高いところ立っていて、光っている男と一緒にナツメヤシを食べていた。粘っているナツメヤシ。光っている男のそばに立って、一緒にナツメヤシを食べるのが、なんて主人に似合っていた。次は亡くなった母を見た。産石に粘って、それを貰いて、入ろうとしていた石はまるで裸だった。写真と全然違っていた。真っ平で洗練された大きな石で、縁が上手に削られていた。母は、石が石ではなく、ガラスで、その後ろに読まなければならぬ秘密が書いてあるように、顔を石につけていた。次の瞬間に石は地面の上ではなく、宇宙に浮かんでいった。けれど、行くか来るか区別されていなく、ただの黒い幾何学的図形で、何処にも辿らずと落下していた。そして、鮮明な血の匂いが漂ってきた。下に、虐殺された羊達があつて、メッカの日の下に、死に誘惑された青い



目をしていた。巡礼するときには、観覧車に乗っている感じがした。観覧車は激しく走って、私は不安のあまりに、笑ったり、怖がったりして、叫んで、笑い、回るのではなく、まっすぐ前に飛び込みたかった。光よりも声よりも早く、空に浮かぶ石に突っ込む槍のように。その後は、落ちかけていた。何処から分からない。頭や足の方向が分かっていなかったが、ずっと落ちていた。そして、落ちるままに、胸を強く蹴られる感じがした。神様よ、なんて残酷で強い蹴り。このように殴られたことはないのだ。

ふと起きた。主人は提灯を灯して、部屋を出ていた。扉の音が聞こえていた。なんて不気味な音。ドアが握った券に叩かれていた。もはや半時間も叩かれているのだろう。なんて強い拳。痛くないのかな。

そして、主人がドアを開けたのが聞こえた。男性的な高い声が聞こえた。と、主人はドアを閉めずに、戻って来た。提灯の光は、主人の柄を巨人のように壁に映していた。

アイエ、アイエ、起きるんだ。アイエ、君に用があるんだって」

起きてるよ。あなた、何のことなの？」

起きろ。二人が君を連れに来ているんだ。妊産婦がいるらしい。遠いところなようだ。馬に乗って来てる」

馬に乗ってきてる。近所に助産師がいないの？」

「、二人のところを訪ねたけど、用事があって、世話を見れなかった。はやく起きろって。非常に寒いぞ。妊産婦を待たせるわけには行かないだろう」

「あなたも一緒に来るの？」

「うっん、俺が行く必要はないだろう。いい人たちなようだ。かっこを見ると、素直な人に見える」

ウールの服を身に付けて、主人が持っているカーディガンを着た。ウールの靴下を履く頭巾馬を押し破れた。頭巾も鞍提冊も持っていた。馬に乗るも木柄だ。木の体から湯気がぬ背の隣に脚が地面を蹴る。顔が腫れを電を握る。彼の口、何かも出る息が、馬の息と混ざっていた。なんて男っぽい姿勢。こんな大柄の男を見たことはなかったのだ。

まだ起きていなく、夢を見ているようだった。

主人に馬に載せてもらった。主人は私の足を鐙に付けてから、こつ言った。

「これは手綱だ。放すんじゃないよ。体に気を付けろ」

「行って来るね」

「ああ」

主人は、私が男達と約束でもをしていたような態度を取っていた。こんな夜中に、なんて疑惑を。

男達は甲高い声で、主人にさようならと言った。彼らの声の奇妙さは、夜や雪、暗闇のせいだつてことにした。馬たちの頭を逆の方に向かせて、出発した。私は真ん中の馬に乗って、一人の男は私の後ろで、もう一人は私の前に行っていた。たまに、馬の蹄は、雪に覆われていない石に触って、蹄の音が立っていた。路地に誰もいなかった。路地の先に辿ると、前の馬に乗っている男は馬を降りて、私の馬のほうに來た。後ろの男も馬を降りて、私の方に来ていたのだ。何で？馬から降ろされた。夜は雪に吞まれていたのに、男達の顔が見えていなかった。一人の男は、ポケットからハンカチを出して、私の後ろに行き、ハンカチで私の目を覆った。どうしてこんなことをするのか？私に何をするつもりなの？それを開けてよ」と言つて、手をハンカチの方に上げた。

男達の一人が、私の手を掴んで、力強く下した。

怖がるな、助産師。あなたに何もしない。ただ、どこに行かぬのかを知ってほしくないんだ。無事に家に連れて行ってあげると安心しな」

目を開けてくれないでしょうか。誰にも話さないと言つてから」と私は行つた。

誰かに話したら、我々はそれが分かつて、あなたを殺してしまつぞ」と二人目の男が返した。

「どうして？私は赤ちゃんを産ませるんじゃないの？」と私は聞いた。

「ああ。あなたはただ赤ちゃんを産ませるんだ、それだけ。その後、ちゃんと家に連れて行ってあげる」と二人目の男は答えた。

「じゃ、なんで私の目を覆うの？」と言つた。

それは後で分かる」と一人目の男は言った。

それ以上、もう何も言わなかった。泣きなくなっていた。私が泣いてると彼らは知っていた。目を覆われる以外、苛めらることはなかった。一人は私を上げて、馬に乗せ、手綱を手に持たせて、私の足を鎧に付けた。神様よ、この人たちは私をどこに行かせ、どの彼らは、私に方向を知られないように二、三度も馬たちを回転させた。まずはしばらく下り坂を進んで、そして上り坂をのぼって、また上り坂をのぼって、風は正面からやって来て、私の顔や体を強く殴っていた。たまに、手綱を放して、ハン力子を開け、どこに行くのかを見ようと思っていた。けれど、私が乗っている馬は真ん中の馬で、することを後ろの男に見られるはずで、周りを見させてくれるわけがなかった。怒って、脅しを実現するかも知れないし。もう町を出て、街の周辺の荒野に馬を走らせるようになった。馬たちが早く走っていたのだ。馬の動きが楽しかったが、心配だった。主人は一緒に行つてあげると提案していたら、よかった。ある丘を上って、山道なようなもの細い道に入った。上り坂を上っていたのだ。馬たちは蹄が石を強く触って、喘ぎながら道を上っていた。一時間ほども上り坂を上って、馬たちはもう苦勞して歩いていて、赤ちゃんを山の頂上に産む人って誰なんだろう。ずっとまっすぐに座ったせいで体はもう鈍感になって、手綱が手の中で凍っていた。が、私の馬は前の馬を追って、進んでいった。背中に目を覆われた可哀相な女が座っているんだと、馬も知っていたんだらう。山の上に辿つて、馬たちは苦勞せず、平らな細道を、多分崖の際を曲げて通りながら進んでいた。いよいよ馬たちが止まって、二人の男は馬を降りて、私をも馬から降りさせた。目を覆われたまま家の中に連れて行かれた。不思議な賑やかさが聞こえていた。オムレツと薪の火で温まった油の匂いが漂っていた。女性の声なんか聞こえていなかった。私が着く前に、赤ちゃんが生まれたかも知れない。でも、赤ちゃんの声も聞こえていなかった。男達はひそひそ話をして、妊産婦の呻きなどがまっただけでなかった。チャードルを被ったまま、立っていて、何をすべきかを言われることを待っていた。恐怖に包まれていた。

助産に何が必要なんだ？」と一人の男が聞いてきた。

まずは妊産婦に会いたい。ちゃんと診ないと」

診に会う必要はない。四日前から産もつとっている。四、五日も遅れていると言いかねない。あなたはただ何が必要だと言っておけばいい」

他の助産師に妊産婦を診てもらっていないの？」と聞いてみた。

「うん、勝手に産めると思ったなら、昨日やはり一人で産めないんだと判断したんだ」と彼は説明した。

沸き立って、少しぬるくなった水がほしい。それと石鹼や溶けたぬるい油も必要だ。鋏やペトロマックスもちょうだい。光の強い提灯でもいいわ」

「その全部があるぞ」

「では、妊産婦に会わせて」

一人の男が私の手を引いて、部屋の隅に連れて「ここを見ることを何処かに話したら、あなたの首を切ってしまうぞ」と言った。

私は妊産婦に赤ちゃんを産ませるんじゃないの？」と私は言った。

「ああ。でも、この妊産婦は普通の妊産婦じゃないんだ。これから自分で見る。でも、妊産婦の部屋を出ると、妊産婦なんかを見たことを忘れなければいけない」と彼は返した。

「可哀相な女に何をするつもりなの？私は文句言わない。赤ちゃんを生まれさせて、家に帰りたい」

「それはいい。いい助産師だ、ブラボー」

と、男は私の腕を手にとって、別の部屋に、そしてまた別の部屋に注意深く案内した。

「ここに妊産婦を見つけれ。赤ちゃんが生まれたら、呼びかけるんだ。我々は来る」

「覆われた目で産ませるとでも言ってるの？」と私はイライラして、返した。

「あ、そっだ、わるい、忘れてた。俺に背を向ける。振り返って、俺を見ようとするんじゃないよ。俺はハンカチを開けて、部屋を出る。誰もあなたに手伝わない。赤ちゃんを産ませて、我々を呼ぶんだ」と彼は言った。

男に背を向けると、彼はハンカチを取って、部屋を出て、ドアを閉めた。部屋の中にも見えていなかった。驚いて、目をこすった。誰かが冗談したんじゃないかと確認したかった。数日前建てられて、窓を覆ったようなまだ湿っぽい新しい壁が見えた。必要な道具はドアのそばに置いてあった。でも妊産婦は？前のドア、部屋に入ってきたドアを通ったが、別の部屋にも誰も見えなかった。部屋は空で、前の部屋のように畳敷き

だった。驚いた。ここはモスクでもだと言っの？しかし、次の部屋の閉めたドアの下に光が見えていた。妊産婦は次の部屋にいるんだろう。真ん中の部屋の窓も壁で覆ってあった。前の部屋に戻って、必要な道具を取り、提灯を携えてきて、徐々に次の部屋のドアを開けてみた。最初は何も見えず、妊産婦は別の部屋にいるかと思った。全てはたちの悪い冗談なのかも知れないとも思った。道具をドアのそばに置いて、ドアを閉めると、今まで嗅いだことのない酷い匂いに気付いた。赤ちゃんは妊産婦のお腹の中に死んだんじゃないのかしらうでも、死んだ赤ちゃんはこんな匂いをしないはずだ。部屋の中に人間の呼吸の音が聞こえた。私に背を向けて、不定期に呼吸して、勝手に力を入れていた。肥満のせいで、赤ちゃんが生まれられないんだろう。それとも窒息したんだろう。

後ろから「ひどく痛いのか？」と穏やかに聞いてみた。

答えが来なかった。もう少し前に進んだ。呼吸の音がもっと高く、腐乱の臭いももっと酷くなった。質問を繰り返してみた。布の下にあつて、見えない頭が動いた。なんて大きな丸顔。そして、なんて重く動いていた。前に、後ろに、また前に、後ろに。けれど、頭から声が出ていなかった。数秒が経つと、頭の動きは止まった。また前に進んだ私は、妊産婦の頭がぜんぜん見えていなかった。何か仮面みたいなものに、妊産婦の顔や頭が覆われて、首のところに細いゴムが仮面の回りに付けてあった。仮面の後ろに、息が苦しく吐いたり、吹いたりしていた。それにしてもなんて大きくて不細工な体。こんな大柄の女が世界中を探しても見つかるはずがない。妊産婦は子供を産むようなポーズにならせられていた。暗色の布が、妊産婦の脚や下半身を覆ってあった。その布のしたから臭いが漂ってきていた。でも、太ももが強くて太くて、言えば巨大だったってことが丸見えだった。脚が布を超えて、外にあった。大きな脚で、膨らんでいた。妊産婦は控えず、塩を食べ過ぎたせいで体がこのように膨らんでしまったのだろう。その人の脚にちっとも優雅さが見えていなかった。足首が汚くて、汚れだらけだった。怖がるべきだっことを忘れるほど恐ろしい生物だった。驚異が恐怖を超えていた。

首の回りからゴムを外して、仮面を取ろうと手を伸ばした。仮面の下に暴力的に頭を動かして、歯軋りの音がその下から聞こえた。そして、呻き始めた。喉の奥から出てくる、性のない呻き。最初はひどい歯痛の呻きに似ていたが、絶叫し始めて、力を入れたり、喘いだりした。見た妊産婦の中に、こう唸る女がいなかった。が、その人に同情した。こんな大きな生物は、腰か脚の骨を壊された動物のように呻いて、絶叫していた。でも、絶叫に女性らしいものがなかった。この仮面の後ろに待ち伏せして、唸り、唸りが猛獣のおろおろした呻きに似ているのは誰なんだろう？

提灯の光の下で診よつと思つて、布を脚の上から取るよつとしたが、その人は怒つて、脚を動かして、閉めて、手を布の下から出して、手を握り、脅威なポーズをした。立ち上がつて、私を絞め殺したかつたよつなポーズ。

狂人や癲癇患者の妊産婦をいくらでも見たことがあつた。出産より、女性の気を紛らすはないと分かつていた。女性は世界中の一番面白い生き物だと分かつていた。その体の状態が変わる。月経から十四日後、女の体は胚珠を作り、熱が上がつて、すぐ下がつて、女はまた月経に近づくんだと国立病院の助産師に聞いていた。九ヶ月と数日で赤ちゃんを産めて、体の血が乳に變つて、乳が血に變る。妊娠とは不思議な行為なのだ。女はそうして創造性を体に入らせて、それを身に付け、そして創造するのだ。女性は創造に憧れているのだ。女性の体は世の中の科学を全て経験するのだと母が言つていた。全ての芸術もだ。母はどうしてそんなことを分かつていたんだらうかある日、妊娠したら、世の中を経験するのだ。でも、妊娠に似てる経験は他にないわ」と母は私に言つた。中からの圧倒が女性を狂わしてから、赤ちゃんが生まれるのだ。拷問と同じだけれど、男性と寝るよりも出産を楽しんだ女性を知つてゐる。知らない生物が中から体を破れて、外に這つてくる。出産のとき、気持ちがいい、神様よ、気持ちがいい、なんて楽しい、これより楽しいことはない、神様よ、出産の楽しみが続けますよつに」と叫んでいた女性を知つてゐる。そして、赤ちゃんが生まれた後、無比に安らかなになる。乱れる海が和やかになるのだ。女の体は休む。男性の体は、この変更や経験、楽しみや痛みに恵まれてゐない。だから、女性の方が忍耐力が強いのだ。

妊産婦は痛みや楽しみを全て味わうよつに、私は千の技やトリックを使用する。

「あなたが誰なのか知らないわ。真夜中に、目を覆われたり、脅されたりして、寒いにもかかわらず馬に乗つて、危ううごに連れてこられたの。悪い真似をしたあいつらが嫌いな。けど、私には義務があるの。妊産婦をほつとして、勝手に産ませないのよ。あなた、ほんとに妊産婦なら、赤ちゃんを私に産ませて。じゃないと、私は帰るわ」と妊産婦に叫んで、言つた。立ち上がつて、帰ろうとした。まだ絶叫してゐた。抗議の絶叫。ドアを開けて、別の部屋に出た。そこにドアを開けよつとすると、向こつから鍵がかけてあつた。拳でドアを叩いた。向こつから生まれたか？」と聞いてきた。

「うふん、生まれてゐない。この妊産婦は産む気はないの。触れることさえを許さな  
いわ。触れないと、産ませるよつもできない」

「赤ちゃんを産ませない限り、ここを出るわけには行かない。分かつてたか？」と向こつ  
の聲が返してきた。と、声の持ち主の足音がドアを離れた。拳でドアを叩いた。今度は

もつと強く。でも外から返事なんかがなかった。向こうにはみんな死んでいたような仕方なく、妊産婦の部屋に戻った。まだ唸ったり、絶叫したりする状態だった。

部屋の隅に行つて、どうしようかと考えた。こんな大柄の体でもメチャクチャな状態で弱くなって、私を傷めることができていなかった。ふとその人に飛びか勝て、無理矢理に布を両手で外した。その人の手や下半身が裸になった。肥満して、毛深かった。膝や足ももを閉めて、大きなお腹が球状になっていた。でもその大きなお腹が、身に付けるシャツの中に隠れていた。手を握つて、上げた。とても脅威的ポーズだったが、そんな状態で当然に立ち上がれなかった。その人の前に立つて、怒鳴つた。

「ちやんと聞きなさい、私は助産師なの。三十年以上もなる。今までこんな頑固な妊産婦を見たこともないわ。あなたは赤ちゃんを産むべきなの。しないとここで腐つて死ぬのよ。私に診させるべきなの。赤ちゃんはどんな状態なのかを診させるべきなの。手をあなたのお腹に置いて見なければならぬ。足の間を診させるべきよ。させないよ、腐つて、死んじゃう。このふざけた仮面も外しなさい。出産は恥ずかしいことじゃないの…」

などと言いながら、その人の足の間に気付いて、愕然とした。神様よ、これはいったい何？！このほごう夢かも。妊産婦も、私が普通じゃない状況に気付いたってことが分かった。唸りを止めたもの。私は注意深く足の間を見て、確認した。間違いない。夢じゃなかった。間違っていないかった。でも何で？どうして？ありえない。別の部屋に走りドアに飛び掛つて、叫んだ。

私をここから出して。速く。ふざけてるのか？この動物以下たち。面を失くさせてやるからな」

ども、ドアの向こうから何も聞こえなかった。

不幸な助産師を真夜中に、雪や寒さ中に、街からこんな山の頂上に連れて、恥知らずな巨人と部屋に二人きりにして、その大きなお腹から赤ちゃんを産めと言つて？」

でも、ドアの向こうにいる人たちが怖くて逃げでもしたようだった。それとも黙つて、私の次の行為を察したかった。

助産師よ、楽にしてくれ、ここに帰つて、私を楽にしてくれ」

男声だった。妊産婦の部屋から聞こえていた。やっぱり妊産婦は男性だ。でもありえないじゃない。男性は産むわけがないだろ？。また男の声が聞こえた。

助産師よ、頼む、楽にしてくれ、痛いんだ、凄く痛いんだ、善行為になるから、楽にしてくれ」

部屋に戻った。主人以外の男性と、二人きりになるのが初めてだった。主人が分かったら、何を言うんだろっ。

でも、この男は普通の男だってわけじゃなかった。前みたいに、体が半分横たわって、唸ったり、拳を投げたりしていた。と、時々膝や脚もが開いて、私は彼のあそこが見えていた。お腹の下に。なぜこの男はこうなってしまったのか分かっていかなかった。

助産師よ、頼む、楽にしてくれ、もう堪えられないんだ、何とかしてくれ、速く何とかしてくれ」

あなたには男性の助産師を連れてくるべきなの。アルメニア人の助産師がいる男性ね。医者で、外国に留学したらいいわ。彼を連れて来させたほうがいいの。何が起きているのが、彼がわかるかも知れない」

「うん、駄目だ、遅くなってしまっ、もうすぐだと思うよ、痛みに堪えられないんだ」

この男は真面目に赤ちゃんを産むんだと信じているのだろうか？

私は、どの妊産婦にもする平凡な質問を試してみた。

「未経産なの？」

「うん、最初で最後の出産。なんて痛いんだ。お前たち女が経験する痛みが分かってきた」

「父親は誰？」

「外国人だった。逃げちゃった」

「なるほど。私生児だってわけね」

彼はもつ何も言わなかった。呻いたりして、拳を頭のほうに上げて、そして強く下ろしてそばの藁を叩いていた。そしてまた呼吸して、深呼吸して、また唸ったりしていた。そしてまた拳。

傾いた。彼は脚を開けた。抵抗は無駄だと諦めていたらしい。なるべく彼のあそこが見えるのを避けようとしていたけど、そんなことは有り得るのか。いずれにしても、赤



ちゃんは何処から生まれるべきだろうその何処かはちよと私が見てはいけなところ、それともそのすぐ下か上だった。もしこを出られたら、二度と助産師の仕事はないと自分と約束した。何をしているのか、何をすべきなのか、ぜんぜん分かっていなかった。

石鹸を取り、手を温かい水の中に洗って、器のそばに置いてあるタオルで拭いた。それから、手を伸ばして、忌むあその下に、ようやく赤ちゃんが出るべき所だと思つてころを見つけて、指を穩やかにその中に入れた。すると驚くことに赤ちゃんの半硬質の頭をその中に触れた。大きい塗ったお腹の上に別の手を置いて、その回りを触れた。間違ひなく、赤ちゃんだった。心臓に近い所だろうと思つ場所に手を置いてみた。なんとか生きているんだと感じた。

生きている」

それは自分で分かる。動くのを感じる」と彼は言った。

彼の言うことに構っていなかった。妊産婦は赤ちゃんが動くのを感じると言うのに、実は赤ちゃんが二十四時間前に死んじやったんだけれど、何度もあるから。

指を穩やかにその中に入れると、赤ちゃんの膨らんだ頭が私の手に触れた。手で頭が出れる余裕を開けて、その間に、忌まわしい所に触れないように注意していた。その後は、その二三個の無用な肉や皮膚にも慣れて、忌まなかつた。

力を入れなさい。深呼吸して。また力を入れなさい。深呼吸して」と彼に命じた。

と、彼は始めた。苦勞して、力を入れ、喘いでいた。で、私は両手を穴のように赤ちゃんの頭の回りに置いて、出て来るのを待っていた。ようやく妊産婦は絶叫を上げて、その後、氣絶したと思う。もう唸りも呻きも上げなかつたから。赤ちゃんの頭が出ていた。大きな頭で、私はそれを手で支えた。そして、赤ちゃんの柔らかい肩が外に這つて来て、その後も体や両足が出て、全ては完璧に進み、赤ちゃんは生きて、完全に私の手の中にいた。他の赤ちゃんよりも機嫌の悪い赤ちゃんで、男の子だった。

赤ちゃんを、畳の上に置いてある小さな枕の上に置いて、へその緒を切った。出産の形式がもはや終わっていた。

妊産婦は氣絶しいてい、部屋は血だらけになっていた。用意してもらつた道具の中にある綺麗なタオルを取つて、赤ちゃんが出てきた所を綿で塞いで、その上にタオル

を置いて、包帯してから立ち上がった。妊産婦を正体を暴く時間だった。ゆっくり首の回りのゴムを外した。彼は動かなかった。仮面を取ってみると、愕然とした。

上品で厳肅な男の苦しんだ顔で、長い髭を持って、苦しみで歪んだ唇をしていた。奇麗な顔をしていた。仮面を外してみると、頭と首がけて大きく見えていなかった。お腹や腕も大きくなかった。赤ちゃんが彼の体のあらゆる所に棲んでいて、その体を大きくさせて、生まれると体が大きいである理由がなくなったように。それにしても男は、いぶん年を取っていた。目を開けて、眼の色を見よと思ったが、起こしてしまふと、考えて、諦めた。苦しみが彼の顔に記していた。彼に対して、私の頭と心が同時に尊敬で忌む感覚に溢れていた。仮面を彼の顔に被って、ゴムも付けてやった。驚くことは赤ちゃんがぜんぜん泣いたり、叫んだりしていないってことだった。じゃないと、「母」を起こしてたんだらう。手を洗って、チャードルを被って、ドアの方に行った。あそこを出て、帰らなければならなかった。穏やかに、ハンカチを目から外してもらった部屋のドアを叩いた。一瞬待った。何も聞こえていなかった。またドアを叩いた。

「ドアを開けて。赤ちゃんが生まれたの」

ふとドアの向こうに騒ぎが聞こえてきた。ドアを半分開けると、私はドアの方に飛び掛って、出よとしたが、すぐにドアが閉まってしまった。

「だから、赤ちゃんが生まれたって。約束を守りなさいよ、私を帰らせるべきなの」と叫んだ。

「ドアを開ける。でも、背を向けて、目をハンカチで覆わせるんだ、いい？」とドアの向こうから、声が言ってきた。

「あんたたち狂人なの、狂人。この男は、どうして妊娠したか、分かっているんでしょ？」と私は返した。

家に帰りたいければ、目にハンカチを付けさせるんだ」と向こうの声があった。

分かったわ、入って」と私は言った。中に入って、ハンカチで私を目を覆ったら、妊産婦がいる部屋に走った人たちがいた。子供を上げて、妊産婦を囲み、踊ったりして、パーティーをしているようだった。両手を二人の人に捕まえられ、外に出られた。天気は涼しくて、快かった。吐き気がして、吐くほど快かった。あの二人が私を待って、その後また同じ馬に乗り、山を下りた。タブリーズの朝の匂いが街のほうから漂ってきていた。五十年もこの匂いと暮らしてきたのに、今はなんて不思議に感じていた。家の門に

着くと馬から下りられた。一人が私の手を捕まえて、紐を解け、手の中に高い紙幣を渡した。もう一人はノックをした。が、主人がドアを開けるのを待たず、二人ともが馬に乗って逃げていった。主人に顔を見られるのを避けたかっただろう。主人はドアを開けて、私の目を開けてくれた。

何が起こったのか？」

別に」

「いや、話すんだ、苛められたのか？」

苛めって、何のことをかを承知して、「うん、そういう意味で苛められたんじゃないわ、ただ出産が大変だったの」と答えた。

ならば、何で目を覆われていた？」

なんでだろう、私は全てを見たというのに、何で目を覆われたのかな」

見たって、何を？」

何もかもを。世の中はどくなってるんだってことを」

世の中はどくなってるんだって、何のことなのか？」

今はクタクタに疲れているよ。いつかあなたにも語るかも知れないけど、今はダメ。今はくたびれるの、飽きるの、彼らもあなたも何もかもにも飽きて、寝たいの」と言った。

主人は私の腕を取って、ベッドに連れて行くこととしたが、私は腕を放った。私の腕を捕まる手がなんて嫌いだった。

主人は驚いて、何だ？一緒に来て欲しかったのなら、言ってくればいいもの」と言った。

あなたは一緒に来ても、同じだったわ。あなたは物事を変える者か」

主人は、私に軽侮されるばかりだと思うようになったが、私は起こったことをちゃんと彼に話す気分がなかった。そもそも誰かに話せるような話じゃなかった。ベッドに陥って、覚醒の悪夢の中に寝た。と、死体を産石の回りに巡礼させるという夢を見た。つまり先に頭を死の白衣に包まれていた。大勢の人たちが、暑さの中で跳ねたり、回ったり

して、祈りを捧げて、私をも産石の回りに運んで回っていた。起きても、また同じ夢を見ていた。寝たら、また夢を見ていた。回りに浮かぶ顔の中に、死んで、死の白衣に包まれたまま産石の回りを回っていた。そして、起きて、また寝ることが繰り返されるに飽きた陥った。高いところから落ちるような、バラバラになった石のような。で、人生を散り散りの夢のように送り続けた。

数日後、ようやく起きると、何週間も拷問されたように体が疲れていた。二つの若い顔は私の顔に傾いて、ずっと私が起きるのを待っていたようだった。アヤズとカラムの顔。部屋が妙に明るすぎて、目を閉じて、また開けて、何度も目を開閉するのを繰り返した。と、正午で、窓から光が辿ってくるんだと分かった。アヤズとカラムに、私を立たせて、窓のそばに連れて行ってくれるように頼んだ。彼らはそうしてくれると、窓のそばから、外の真っ白な雪をじっと見た。なんて明るい日差し。外は暖かいだろう、っていか暑いかな。立ち上がれて、奥の部屋の窓を開けて、山を見れたかった。頂上にモスクの遺跡が見える山。あの事件が本当に起こったのだろうか。そのモスクは何世紀前からも遺跡になっているそうだ。アヤズとカラムには、私の秘密を聞く気力があるのだろうか。

二人の息子が私のそばに座って、啞然とした顔で私を見つめていた。あの事件から、一週間も経って、また金曜日なようで、アヤズも家にいた。

大きな猫が右の壁のそばから静かに雪を歩いて、前の壁のほうに行った。大きくて、灰色の憎たらしい猫で、前の壁に付くと、口を出来るだけ開けて、鋭い歯を見せた。そして、アヤズの鳩達の巢のそばに行き、待ち伏せをして、一羽の鳩が油断して、出てしまつのを希望して、待った。私はカラムが自分で気付くのを待っていたが、彼は気付いていなかったから、小さい声で彼に声を掛けた。

カラム、チエゲルが待ち伏せした猫に狙われてるわ」

カラムは頭を上げて、猫が見え、速く棒を手にとって、猫を追い出しに行った。

アヤズはもっと私に近寄って、私の顔を手に取り、視線を私の目の中に沈んだ。

何が起こったの、お母さん」

アヤズ、何かが起こったと思ってるの？」

知らないのなら、何も起こらなかったんだろっ」

まったくアヤズめ。特に目を見つめられるとなんて狂わしい気分になってしまった。

やはり何かが起こったんだね、私に隠すことがあってはいけないだろう？」

彼の視線から逃げるため、話を変えた。

「お父さんはいつ帰ってくるの？」

「二週間後」と彼は答えて、何が起こった、お母さん、話してくれよ」としつこく聞いた。

顔を彼の手から放れて、振り返り、横たわって、頭をアヤズの足におき、窓の向こうの日に夢中になった。



レザバラヘニ

一九七九年十月テヘラン